



血の勇者  
田中光二  
集英社  
(7/25刊・¥880)

南海の島を舞台にした作品が、冒頭と巻末に収められている。標題作「勇者の血」と、「牙と星砂」の二篇だが、あえてジャンル分けするのなら、冒険小説に入るのだろう。本書の雰囲気は、エッセイ風の「パラダイス島の幻想」を中心に、南海への旅の感性に支配されているように思える。たとえば、「真性脱水症候群」で、ふつうなら嫌悪を持って扱われるはずの海への帰還が、きわめて肯定的に結論付けられるのも、そんな感慨があるが故である（対照的なのが、ラヴクラフト「インスマウスの影」など）。海を本質的にどう捕えるのか——本書だけに限らないけれど、その思い入れが、田中光二の海を舞台にした作品に見られる、独特の味だろう。

その他、少年の見た、不思議な旅芸人たちの話「幻想曲芸団」、未来刑事もののシリーズに属する二篇「灰色の衣を着た男」と「殺人鬼の夜」が収められている。後者は、近未来を舞台にした、二人の刑事の連作もの。もう一篇「旅・暮色の輝き」は、バリから南国々の思い出を連想するという、やはりエッセイ風の作品。以上、八〇年から八一年前半にかけての、八短篇を収録している。（侵）